

令和6年度修士論文題目一覧

統合新領域学府ユーザー感性スタディーズ専攻修士課程

学位	学生氏名	研究課題	論文公開可否	論文概要可否
修士(感性学)	大本 航	車両津波避難に関する学習環境の分析 —高知県黒潮町・錦野地区での実践を例として—	可	可
修士(芸術工学)	内尾 良太郎	「会食恐怖症」という言葉がもたらす影響に関する考察	可	可
修士(感性学)	吉田 周平	ADH特性を持つ博物館来館者の体験を聞き取る方法論	否	可
修士(感性学)	梁 梓超	多文化防災教育ツールのデザインと実践の分析-福岡市博多区吉塚地区を事例として-	否	可
修士(感性学)	田北 雛子	多種による共創の「可能性をひらく」—福岡市の小規模キムチビジネスにみる人間の エージェンシーを前提としないデザインのあり方に関する研究	可	可
修士(芸術工学)	和田 康生	XRを用いたSARデータ解析結果の表現手法に関する研究	否	否

車両津波避難に関する学習環境の分析 —高知県黒潮町・錦野地区での実践を例として—

An Analysis of the Learning Environment for Vehicle Tsunami Evacuation
-An Example of Practice in Nishikino District, Kuroshio Town, Kochi Prefecture -

2FS23004R 大本航 OMOTO Wataru

1. 研究の着眼点

「車両津波避難」は、二次災害誘発の危険性などを理由に、日本では原則非推奨とされてきた[1]。しかし近年、歩行困難者の増加や迅速な避難の必要性などを理由に、車両利用を検討する地域が増加している。こうした状況を踏まえ適切な避難方法を採用するには、各地域の実状に合わせた議論が重要となる。しかし、これまで地域関係者を主体として車両津波避難に関する検討が展開された事例は僅少であり、議論の停滞が課題となっている。

そこで本研究は、車両津波避難を検討する地域を対象に、地域での議論を促進させるための実践提案を行った。具体的には、車両津波避難を検討している高知県黒潮町・錦野地区を対象に、車両津波避難に関する実践を計画する。そして地域関係者と協働的に実践を進める過程で、地域内での議論の進展度合いや地域関係者の意識変容などを分析し、車両津波避難に関する学習環境の要件を検討した。

2. 手法

本研究では高知県黒潮町のうち、錦野地区を対象として選定した。当該地区では過去の地震発生時に車両渋滞を経験したことから、「避難車両の誘導」が課題とされてきた。この課題の解決策として、地域関係者の議論によって「避難車両を誘導するための横断幕制作」が提案されていたが、その実現に向けた活動が停滞している状態であった。

本研究では、錦野地区において提案された「車両誘導を支援する横断幕制作」を、地域関係者が車両津波避難について考える機会、いわゆる学習環境として位置づけることで、地域の議論を促進させることを計画した。具体的には、錦野地区内にある高知県立大方高校の「地域創造コース」において、横断幕制作を授業の一環として活動を実施した。そして筆者らの活動を通じて図 1 の横断幕が地区内に設置された結果、地区では車両津波避難の訓練が実現した。



図1 制作された横断幕（計5か所に設置）

上記の点を踏まえ、地区での議論に横断幕制作が与えた影響をはじめ、検討を進展させる要因について調査を行った。具体的には、横断幕制作の参加者を対象としたアンケートやインタビュー、およびエスノグラフィ調査を実施した。また、本研究では分析の視座として、山内による「学習環境デザイン」の観点を援用する。山内は、ある共同体での実践を通じて発生する学習について注目し、学習環境を「空間」「人工物」「活動」「共同体」の4側面から捉えることで、その効果やデザイン要件を検討している[2]。本研究では地域関係者が車両津波避難について理解を深め検討を進める場を、車両津波避難に関する学習環境と捉え、その要件について上記の視点から分析を行った。

3. 結果・考察

結果の一例として、地区住民に対するエスノグラフィ調査からは住民の車両津波避難に対するイメージが、横断幕制作を通じて具体化された実感を得ている様子が分かった。また役場職員 2 名に対するインタビュー調査の結果、横断幕の副次的機能に加え、高校生の参加が地区住民に与えた影響などを整理することができた。

上記を含む結果に対し、学習環境デザインの4側面から考察を行った。その結果、車両津波避難の検討を促進するうえでは、「実際の課題が含まれる空間」「議論を可視化し、共通理解を生むツールとしての人工物」「検証機会としての訓練」そして「課題に関連する周辺当事者の参加」が重要であることが示唆された。特に本研究の実践は横断幕の制作と設置が中心となっていたことで、関連する「空間」および「人工物」に対する影響が強く生じていた可能性がある。

4. 今後の展望

今回の結果を踏まえ、対象範囲の拡大および各地域の特性を考慮した結果の整理を課題として、今後は車両津波避難の検討における「インターローカリティ」を反映した学習環境デザインの提案を目指す。

参考文献

- [1]内閣府；自動車でも安全かつ確実に避難できる方策，<https://www.bousai.go.jp/jishin/tsunami/hinan/5/pdf/3.pdf>（最終アクセス：2024.12.18）。
- [2]山内祐平；学習環境のイノベーション，東京大学出版会，2020。

「会食恐怖症」という言葉がもたらす影響に関する考察

A Study on the Impact of the Term “Social Phobia”

2FS23005N 内尾良太郎 UCHIO Ryotaro

I. 背景と目的

暴露療法の過程等で、会食恐怖症当事者は周囲に自分が会食恐怖症であることを打ち明けることがある。しかしながら、打ち明ける際に「会食恐怖症」という言葉を用いることに抵抗を覚え、敢えて用いない人がいる。故に、本研究では当事者の中には何故周囲に打ち明ける際に「会食恐怖症」という言葉を用いたくないと感じる人がいるのかをインタビュー調査を踏まえて考察する。それらをもとに「会食恐怖症」という言葉を用いて打ち明ける際に生じている課題を考察し、介入案を提案し、評価する。

II. インタビュー調査、アンケート調査対象者

インタビュー、アンケート調査どちらも同一の会食恐怖症経験者4名と非経験者3名を対象とした。

III. 調査結果まとめ

経験者4名のインタビューから他者に自らの症状を打ち明ける言葉として会食恐怖症という言葉を用いることに否定的な見解を持つ理由を【伝えたい事実と伝わる情報にズレが生じそう】【克服の邪魔をされそう】【打ち明けるとき緊張度高めてしまう】【打ち明ける目的果たせないだろう】【結局説明しなければいけないだろう】【相手への配慮が欠けている】【名前自体が好きじゃない】の7つ、会食恐怖症という言葉が経験者にもたらすポジティブな影響を【克服意識を芽生えさせてくれる言葉】、【自分だけの恥ずかしい悩みではないと気づかせてくれる言葉】の2つ抽出することができた。

また、3名の会食恐怖症非経験者のインタビューから会食恐怖症という言葉聞き、会食恐怖症の人に対してネガティブな見解を持った理由を【打ち明けてきた理由を勝手にネガティブに想像してしまう】【配慮が欠けている】【結局わからないから説明求む】【病名つかうなよ、つくるなよ】の4つ、前向きな見解を持った理由を【受け入れようとする気持ち】【共感しようとする気持ち】【誤解しているかもしれないと気づいている気持ち】【そんなに問題じゃないと思う気持ち】【それでも一緒に食事を楽しみたい気持ち】【一緒に理解しようとする気持ち】の6つ抽出することが出来た。

これらを踏まえて、当事者の中に、周囲に打ち明ける際に「会食恐怖症」という言葉を用いたくないと感じる人がいる理由には、①「会食恐怖症という言葉の不十分さ」②「会食恐怖症の人特有の2種類の予期不安」③「病気ではなく特性として打ち明けたい」といった問題が関係していると考察した。

また、経験者、非経験者はそれぞれ、打ち明け場面において、以下の課題を抱えていると考察した。経験者が抱え

ている課題は、会食恐怖症であることを打ち明ければ、自分が意図していないことが伝わってしまい、打ち明けた相手に「不快感を与えるかもしれない」「不快感を与えられるかもしれない」と過度に会食恐怖症特有の2つのベクトルでの不安(「社交不安症のベクトルでの不安」「対人恐怖症のベクトルでの不安」)を感じていることである。

非経験者が抱えている課題は、非経験者が誰かから会食恐怖症であることを打ち明けられたとき、会食恐怖症と名乗る人のことを「偽物ではないか」と過剰な疑いの目を向けることで生じる勘ぐりと、「本物かもしれない」と寄り添おうとする気持ちによって生じる「病気のことを詳しく尋ねてはいけない」といった配慮の気持ちから会食恐怖症の人を理解するためのコミュニケーションを一方的に途中でやめてしまうことである。

これらの課題考察を踏まえて、経験者、非経験者それぞれに対する介入案を提案し、アンケート調査による評価を行った。経験者が抱える課題に対しては、会食恐怖症であることを打ち明ければ、誤解されて相手に嫌悪感や不快感を抱かれるのではないかと不安に捉われがち視野を広げることが目的とし、インタビュー調査で非経験者3名が会食恐怖症という言葉初めて聞いたときに、会食恐怖症と名乗る人に対して抱いていた嫌悪感や不快感だけではなく寄り添う気持ちといった前向きな多様な気持ちも抱いていたという事実をまとめた絵本風資料を制作し、経験者に読んでもらった。すると提案資料は経験者の3つの視野(相手が抱えている気持ちへの視野、打ち明け後の未来への視野、打ち明け時の行動の視野)を広げられる可能性が示唆された。

非経験者が抱える課題に対しては、インタビュー調査で経験者4名が打ち明け時に感じていた「会食恐怖症に関して誤解されそうなこと」と、「実際の会食恐怖症に関して」をまとめた絵本風資料を作成して非経験者3名に読んでもらった。すると、提案資料は非経験者に対して“ポジティブなきっかけ”と“ネガティブなきっかけ”をもたらす可能性が示唆された。ポジティブな影響としては、【一人一人と向き合う大切さを知るきっかけ】【自分が誤解していることに改めて気づくきっかけ】【疑心の目と不快感を抑制させるきっかけ】【相手のことを知りたいと思うきっかけ】といった要素を通じて、会食恐怖症への理解や関心を深めてみようとするのを促す可能性が示唆された。一方で、ネガティブな影響としては、【理解した気にさせるきっかけ】【自分の気持ちから目をそらすきっかけ】【受け入れる自信喪失のきっかけ】といった課題が生じる可能性も示唆された。

ADH 特性を持つ博物館来館者の体験を聞き取る方法論

Methodology for Listening to the Experiences of Museum Visitors with Attention Deficit Hyperactivity Traits

2FS23006E 吉田周平 YOSHIDA Shuhei

背景

近年、博物館は包摂性を重視し、「誰でも楽しめる」ことを大きな軸としているが、身体障害への配慮は進む一方、発達障害を持つ人々が博物館で直面する困難については十分な対応がなされていない。

本研究の目的

ADH 特性を持つ博物館利用者の体験の実態を把握する。そのために、まずは聞き取りと分析に関わる方法論を模索する。

第1章：「感情」と博物館の“要素”から見た博物館体験の量的傾向

5名のADH特性を持つ人（以下、発話者）に聞き取り調査を行った。発話データを逐語録化後、一文を一切片として、「博物館の“要素”」と発話者の「感情」という2軸でラベリングした。結果を量的に集計し、発話者の博物館体験を把握した。

各発話者は“展示物”や“空間”、そして“個人的要素”を通して博物館体験を楽しんでいると同時に、それらに対して困難を抱えている可能性が示唆された。人によっては、“展示物”を楽しみたいという意欲があるからこそ、“空間”に対する博物館体験がネガティブなものになっていることも明らかになった。また、発話者が感じる博物館体験における楽しみや困り感は、各人により異なることも明らかになった。全体として、ADH特性を持つ人の博物館体験の実態は複雑なものである可能性がわかったが、その背景については明らかにできなかった。それらを明らかにするためには、各発話者のADH特性の多様性を考慮した分析及び定性的分析が必要であると考えた。そこで次に、その多様性を考慮した新たな分析的アプローチを試みた。

第2章：新たな方法論の導入 - 「実行機能」を踏まえた再考察

ADH特性の多様性を考慮した新たな分析的アプローチとして、まず、「ASRSチェックシート」を用い、各発話者のADH特性の傾向を把握することとした。さらに、第1章での2軸「博物館の“要素”」及び発話者の「感情」のラベリングに加え、ADHDの主特性の背景であるとされる「実行機能」を組み込んだ量的・質的分析による再考察を試みた。

その結果、“展示物”“空間”“個人的要素”において“注意

の制御”という実行機能の一領域が大きく影響していることが示唆された。分析に用いた一覧を「ADH特性を持つユーザーの博物館体験マトリクス」と名付け、それをを用いることで発話者の複雑な博物館体験の実態を俯瞰的に捉えることができるようになった。

第3章：総合考察

第1章、第2章を総合すると、実行機能の領域のうち、特に“注意の制御”“ワーキングメモリー”“気持ちのコントロール”が発話者らの博物館体験に影響を与えている可能性が示唆された。それを踏まえ、それぞれの困難を軽減する具体策として、例えば以下のようなものが挙げられる：

“注意の制御”・・・軽い音楽の活用や音量調整が可能なイヤホンの貸し出し、「フィジレット・トイ」の利用

“ワーキングメモリー”・・・視覚的サマリーやデジタルガイドの導入、情報の段階的提示

“気持ちのコントロール”・・・「クワイエットルーム」の利用、時間帯指定による混雑緩和 など

本研究では、ADH特性の多様性に基づく博物館体験の複雑な実態を示すとともに、実行機能を取り入れた新たな分析手法を提示した。一方で、調査数が少ないことや実行機能以外の要因の検討も課題として残る。今後、対象者の拡大や多角的な視点による分析を進めていくことで、ADH特性を持つ博物館利用者の博物館体験モデルを明らかにすることができるだろう。

課題と今後の展望

今後の展望として、①調査するADH特性の多様性と発話者の数を増やした調査、②ADHDの診断を受けていない人も含めた調査を行いたい。このことにより、博物館体験の実態をさらに明らかにしながら、博物館体験マトリクスの有効性を検証できるようになるだろう。また、ADH特性と強く関わるとされる「相手の期待に沿いすぎる」傾向が回答に影響している可能性があることを踏まえ、実際に博物館に発話者と行き、その場での体験を記録する調査も必要である。

筆者は、博物館が真に「誰でも楽しめる」ものとなるよう、基礎的環境整備や合理的配慮を含めた取り組みを進め、来館者と博物館双方に負担を強くない形での支援策を探ることを目指す。本研究が、より多様な人々が博物館を楽しめる環境づくりの一助となれば幸いである。

多文化防災教育ツールのデザインと実践の分析ー福岡市博多区吉塚地区を事例としてー

Analysis of the Design and Practice of Multicultural Disaster Prevention Education Tools - A Case Study of the Yoshizuka Area in Fukuoka City -

2FS23007K 梁梓超 LIANG Zichao

【序章】

気候変動の進行に伴い、自然災害の頻度と規模が世界的に増加する中、日本では防災教育が長年にわたり重視されてきた。しかし、現行の防災教育は日本人住民を主な対象としており、外国にルーツを持つ住民（以下、外国ルーツ住民と表記）の特殊なニーズや文化的差異への配慮が十分ではない。その結果、外国ルーツ住民は災害時に言語の壁や情報不足などの課題に直面しやすい。

本研究では、福岡市博多区吉塚地区を事例とし、多文化防災教育活動の設計と実践を通じて、外国ルーツ住民と日本人住民が共に参加できる防災教育の有効性を検証することを目的としている。また、教育活動が地域住民間の相互作用や災害対応能力に与える影響についても評価する。

本研究の成果は、多文化共生社会における防災教育の新たな方向性を示し、多文化地域の防災力向上と地域協力の促進に貢献することを目指している。

【予備調査】

日本における防災教育の現状を把握するために、予備調査は、日本における防災教育の動向と課題を検討したものである。具体的には、防災教育チャレンジプランの事例に対する量的・質的な調査を行い、防災教育の傾向を分析した。その結果、日本における防災教育は災害の発生に呼応するように発展していることがわかった。さらに、日本では防災教育の多様な手法が開発されている一方で、既存の防災教育の課題を検証し改善する実践が少ないことも明らかになった。その中の具体的な陥穽や課題は三つがある：一つ目は対象者では外国ルーツ住民や妊婦、高齢者、障がい者への配慮が不足していること。二つ目は新たなツールの開発が進む一方で、既存ツールへの批判的思考や評価・検証が不足していること。三つ目は、防災教育が狭義の知識伝達に留まり、その多面的な効用を十分に活かされていないこと。

【研究の背景】

日本における在留外国人住民は増加を続け、2023年には341万人に達した（出入国在留管理庁、2024）。外国ルーツ住民は災害対応の経験や認識が不足しているため、防災教育が重要視されている。阪神・淡路大震災以降、「やさしい日本語」や多言語防災マニュアルの普及をはじめ、留学生や技能実習生を対象とした教育手法や多媒体技術を活用した情報提供が進展し、防災教育は言語支援や手法の面で発展を遂げている。

【研究の目的】

本研究の目的は、地域を基盤とした多文化防災教育の場

をデザインし、その効果と影響を明らかにすることである。既往研究の多くは、留学生や技能実習生など限定的な外国ルーツ住民を対象とした防災教育に焦点を当てており、日本人住民との相互関係や影響を考慮した研究は少ない。本研究では、外国ルーツ住民と日本人住民が共に暮らすコミュニティに注目し、両者の協力や交流を通じて、より効果的な防災教育の方法を探求する。特に、筆者自身が外国ルーツ住民の当事者として地域住民と協働し、多文化共生の視点から防災教育の課題解決を試みた点に新規性がある。本研究は、実践と分析を通じて多文化防災教育の可能性を示すものである。

【本調査】

調査対象と方法：本研究は福岡市博多区吉塚地区を対象に、外国ルーツ住民と日本人住民の双方と協働し、多文化防災教育のツールや場のデザインと実践を行った。また、質的および量的なデータ収集と分析を用いて、多文化共生の視点から調査を進めた。

吉塚ダイアログの概要：「吉塚ダイアログ」では、地域住民が異文化間の理解を深め、防災への理解を高めることを目的に、多言語対応や文化適応を考慮した防災教育を実践。商店街や地域団体の協力を得て、地域のシンボルを活用した交流の場を提供した。

調査結果：(1) 準備段階の変化として、参加者は活動前の調査において、防災知識や異文化交流に対する期待が向上していることが確認された。(2) 実施段階の変化として、活動中、住民間の交流が活発化し、防災能力や協働意識が向上した。

【全体考察】

本研究では、同一コミュニティに居住する外国ルーツ住民と日本人住民を対象に、多文化防災教育の手法と場を設計し、その効果を検証した。**①防災に対する態度変容：**吉塚ダイアログを通じて、参加者の災害理解が深まり、具体的な防災知識を得た。また、多文化間の相互理解が促進された。**②多文化共生の促進：**活動により、異なる文化背景を持つ住民が協働し、地域の共助体制が強化された。**③防災教育の課題：**現在の防災教育には偏りや盲点が残る中、多文化共生の視点を取り入れた教育の重要性が確認された。

【引用文献】

出入国在留管理庁（2024）「令和5年末現在における在留外国人数について」

https://www.moj.go.jp/isa/publications/press/13_00040.html, 2024年11月19日。

多種による共創の「可能性をひらく」－福岡市の小規模キムチビジネスに みる人間のエージェンシーを前提としないデザインのあり方に関する研究

Enabling the Possibility of Multispecies Co-Creation: A Study on Design Beyond Human Agency in a Small-Scale Kimchi Business in Fukuoka City

2FS23009M 田北雛子 TAKITA Hinako

近年、人新世を背景として、ポストヒューマニズムが多様な学問・実践分野に広まっている (Forlano, 2017; 楠見, 2023)。デザイン領域でも、人間を脱中心化し、多種とより調和的な関係や世界を築くためのデザイン実践・研究が行われている。一方で、一時的なものも多く、中には皮肉にも「種」の概念を再生産し人間の力の過信へと繋がってしまい得るものもあり、場やコンテキストに根差した実践的・継続的な営みにフォーカスを当てるものはまだ少ない (Forlano, 2017; Westerlaken, 2024)。こうした中、人間以上の絡まり合いによる共創であり、人間のエージェンシーを問い直す可能性を秘める実践として「発酵」に注目が集まっている (Evans & Lorimer, 2023)。本研究では、人間という既存の種・人間の中心性やエージェンシーを前提としないデザインのあり方を発酵の実践を通じて探索する。具体的には、近代の人間中心的・線形的・資本主義的価値規範やシステムに影響を受けながらも、人種や生物種が交わる曖昧な営みとして続いてきた福岡県福岡市千代の小規模ビジネス K 店のキムチづくりに着目し、そこでどのように多種による共創の「可能性をひらく」ことが行われているのかを考察する。多種による共創の「可能性をひらく」とは、差異があるもの同士によって「出来事」や「現象」が生じる可能性を育むことである (Hey, 2021)。予期された現象が確実に生じる、あるいは結果が誰かにとって有益であるという保証はない。K 店との関わりを通じて、多種による創造の可能性をひらく作用にはどのようなものがあるのかを探索し、最終的に、デザインを多種による共創の「可能性をひらく」こととして再定位した時、何を意味するかについて論じた。

研究は、これまで非対称的な力関係にあった物質と言説を同等に扱うことで、人間を脱中心化するニュー・マテリアリズムを哲学的基盤とした。また、多層的な感覚知覚に意識を向けることで、言語や視覚情報に頼らないコミュニケーションルートを通じてものごとを理解し、研究者としての立ち位置により自覚的に研究を行うセンサリー・エスノグラフィーの手法に基づいて行った。わかったことは次の通りである。

まず、K 店のキムチづくりは、韓国がブームとなり和風キムチが広まる前の時代に地域の在日コリアンの

人々とともに作られ始め、多種多様な人との交わりを通して変容し続けることを通して、日本の和風キムチづくりとも在日コリアンのキムチづくりとも差異のあるものとして育まれていることが推察された。

また K 店では、「青果市場」「野菜」「食品衛生に関連する規制等」「個人客」「卸売先」「水分」「気温」「菌」「技術」「コスト」「夏と冬」が関わり、複雑に作用することでキムチづくりの営みを成り立たせていることが見出された。

さらに、K 店では、アッサンブラージュとして排除に対抗し、共創の可能性を残す行為として「余地を残す・つくる」こと、多種によるコミュニケーションや参与を歓迎するあり方として「閉じきらない」こと、多種との協働の調整や知の分散を可能とする「巻き込まれる」ことを通して、共創が生まれる可能性がひらかれてきたことが示唆された。

K 店で見出せた振る舞いは、多種の応じ合いをある種強制するようなものであり、この応じ合いは、常に何かしらの利害をもたらす倫理的な決断になる。K 店で人間として立ち現れるスタッフは、マニュアル通り（あるいは意図的に）動いているわけではなく、身近に立ち現れるさまざまな作用を問いかけ・お願いとして捉え、日々の営みを通じて心で応じていた。このようにデザイン・生きること・政治の境界がぼやかされたとき、個々の人間として果たせる倫理的な責任は「自らが巻き込まれているアッサンブラージュにおいてどのように応じるか」(Bennett, 2010, p.37) にかかっている。K 店のアッサンブラージュは、誰もが巻き込まれる環境において、身体で何を知っているか、どこに何との境界を引いているか、どのように介入を受け止め、応じているのかについて振り返り、心で取り組むことから始めればよいということを教えてくれている。

参考文献

- Bennett, J. (2010). *Vibrant matter: A political ecology of things*. Duke University Press.
- Evans, J., & Lorimer, J. (2023). Fermentation Fetishism and the Emergence of a Political Zymology.
- Forlano, L. (2017). Posthumanism and design. *She Ji: The Journal of Design, Economics, and Innovation*, 3(1), 16-29.
- Hey, M. (2021). *Conspiring to be convivial: Fermentation and living with the microbial other* (Doctoral dissertation, Concordia University). Concordia University.
- Westerlaken, M. (2024). It matters what designs design designs: speculations on multispecies worlding. In Mortimer, C., & Luján Escalante, M.A. (Eds.) *The Trouble with Speculation* (pp. 125-144). Bristol University Press.
- 楠見友輔. (2023). (ポスト) 質的研究をひらく 倫理－存在－認識論に立つ研究. *質的心理学研究*, 22(1), 206-224.